
うんぬん【短編小説集】

ナユタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うんぬん【短編小説集】

【Nコード】

N1168S

【作者名】

ナユタ

【あらすじ】

一話完結で送る短編集です。基本的に短いので、気軽に読んで頂けます。

タイトルの通り、各話ごとに設定したのテーマに沿って云々（うんぬん）と綴っていきます。

風刺や感動ものなど、ジャンルは統一されていません。

【ZZZ】を更新しました。

追憶の宝珠

季節は冬から春へ。

僕の子供は今月から小学生になる。部屋を一つ空けてやり、そこを与えた。

息子は飛び跳ねて喜んだが、整理整頓は大人の仕事。男の子ではあるがまだ危ない。

そんな笑顔を尻目に、僕は庭の物置へ向かう。もう何往復したただろうか。

過去の自分の思い出の代物から有用そうなものを探す。まだ大きい子供用の服も、すぐに成長して使えるようになってしまうのだろう。子供の成長の早さは半端じゃない。そうして、ダンボールは幾つもの空になった。

ボンッ

古いダンボールを奥から引っ張り出した時、ゴムが床に落ち鈍い音がした。

一度作業を中止してそれを拾ってみると、埃まみれではあったが元は綺麗な「スーパースポール」。記憶の何処か遠くの方で、見覚えのある気がする。

埃を振り払い、透き通った青い玉を見つめると、頭に大量の記憶が一気に流れ蘇ってきた。フラッシュバックの後、自然と瞼が閉じる



約三十年前。

親父の手に連れられ、街を歩いているのは僕だ。歳は今の息子と同じくらいか。

ぽつんと佇む店の前まで来る。個人経営で、二階は住居だ。小さな玩具屋である。

店の扉の横にあるガラスケースが勝手に視界に入ってくると、僕はケースの中のものに強い興味を感じた。

これが、欲しい。

青いスーパーボールを父親にねだる。一度は拒否した父も、まだこの歳は全ての要求が通るものであり、結局買ってもらえる。帰り道、僕の興味は全てそのボールに注がれていた。

その後数日間、ボールは僕の遊び相手となった。

この頃の“青”といえば男の子の証。他愛も無いこのボールが、無性に綺麗で格好良く感じられた。

このボールへの興味の波は、数日後にようやく治まる。

恒例ではあるが、次に探してみた時にはもうボールの行方は暗んでしまっていた。

また遊ぼうかと思い、何度も探すが見つからない。そんなことで泣いたくせに、その日の内に諦めた。

只、翌日はボールのことなど頭になく、別の玩具で遊ぶ。

宝物のことも、その宝物の為に流した涙さえ、それから何十年も思
い出すことはなかった――



瞼が開いた。三十年越しの涙が何時の間にかに零れ出していた。
今になって見つかるなんて、皮肉なものだ……。今は思い出の一つ
に過ぎないのに、懐かしくて堪らない。

「おとうさん、ないてるの……？」

声に気付いて振り向くと、息子が物置の入り口でこちらを不思議そ
うに見つめていた。僕は急いで涙を拭いてから、

「なあに、泣いてなんかないよ」

と嘘をついて振舞った。その時、息子の視線が明らかにスーパード
ールに向いているのだ。

時代は変わっても、やっぱり男の子はこういうものが好きになる時
期があるのだろう。

「欲しいか？」

そう尋ねてみると、彼は満面の笑みになって大きく首を縦に振った。

彼は昔の僕そっくりに大喜びし、古くても綺麗なスーパードールを
持って出て行った。今度の遊び相手は息子のようなのだ。

あの子が僕くらいまで大きくなったら、また同じ気持ちになってく
れるはずだ。その時まで宝物が変わらないことはないだろうけど、
何故か嬉しい。

先程まで泣いていたのに、僕は息子の背中を見て微笑んでいた。早速自分の部屋に持って行く様子から、すぐに宝物となりそうだ。スーパースポールも、こんなに長く遊んでもらえて本望だろう。失くしたからこそ捨てずに済んだのかもしれない。

宝物を一つ失くした僕には、もう見つけている宝物がある。

今の僕の宝物は、子供だ。

追憶の宝珠（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

テーマをつけるとするならば『懐古』（ノスタルジア）です。

他のサイトに載せていたものですが、このような小説投稿サイトへの投稿は始めてです。慣れない部分も多いので、誤字・脱字等があったらすみません！

短編の方にも投稿した作品です。

ブラックファイター

——異様に月光の薄い三日月の夜、路上に怪しい影がちらつく。影は素早く移動し、今日のターゲットである家を見上げた。閑静な一軒家だ。

彼女は夜間に家へ忍び込み、必要なものを奪っては暮らす泥棒なのである。

手口はいつも同じ。危うく見つかりそうになったことはあるが、これまで何故か逃げ切ってきた。

彼女の生い立ち是谁も知らない。知ろうとする者もない。知って欲しくもない。

いつでも命懸けの仕事であり、今回だって正直怖い。

それでも残された生きる道は、今のこの世で「これ」しかない。

彼女は鍵をし忘れていた窓からこの家にまんまと侵入。とりあえず人気はない。

一階を捜し歩く。目当てのものは、これまで二階にはあまり見かけた覚えがないからだ。

おそらく侵入場所はリビングだったようだ。他の部屋より幾分広い。

大きな時計を見上げると、短い針は「12」を指している。だが意味は知らない。

この部屋を一通り徘徊し、全体像を掴む。……ここにはない。

次に廊下へ出た。長く続く先に和室があり、奥からは人の寝息が聞こえてくる。

寝ているのであれば大丈夫だ。まだ時間はある。音を立てずに右側の通路へ進んでいく。

小さな部屋の扉の前に来た。するとその時、欲求を掻きたてられる香りがすることに気がついた。

盗みに入る度に、必ず一か所はこの感覚に陥る場所があることを彼女は思い出す。目的地はここか、はたまた別の場所、どちらかだろう……。

扉の下にはバリアフリーの為の小さなスロープがあった。敷居の段差をなくす工夫である。

和室で寝ているのは老人かもしれない。それならもっと安全に作業が行える。若人は二階で寝ているようだ。

スロープに乗り、少し開いた扉のスペースから中に入る。音を立ててはまずいことになる。

しかしそこは彼女の目的地ではない方の場所であった。水とちよつと臭い香りが漂う。

毎回思うが、ここは目的物の香りが微かに残る。もしかすると目的物の末路はここなのか？

小部屋を出て扉を見上げると、そこには「W・C」という文字。だが意味は知らない。

右側を見ると、そこから水の臭いが漂う部屋があった。一応、可能性を感じて行ってみる。

洗面所を経て、また扉を通って中へ。ここもどの家にもある場所だった。

何に使うのかわからないが、必ずドでかい蓋なしの“箱”に水か湯が溜められている。飲み水か？

床に飛び散っていた水滴をすすり、足を滑らせて溺れない内に部屋を出た。

W・C部屋を通り過ぎ、リビングの隣に位置する部屋に辿り着いた。一回りしたということは、一階で最後の部屋だ。

この部屋からは目的物の臭いが充満している。そこはいわゆる台所。入ってきたばかりで、侵入時は隣だったことを嗅ぎつけられなかったらしい。

急いでシンクの上に上るが、そこに目的物はなかった。ここにある家もなくはないのだが。

降りて今度は真っ白な巨大な“箱”の元へ。一番確率の高い箱である。

外側は熱いくせに、内側はとんでもなく寒いのだ。少しでも空いていれば音もなく中の目的物を盗むことができる。時間をかけたが、あと少しだ！

巨大箱を登ろうとして足を掛ける。しかし箱はツルツル滑ってうまく登れない。

カチッ

箱への侵入に手間取っている間に、スイッチを押されて周りの色が一変した。目が慣れないが、これは灯りをつけられたのだ。これには焦った。つまり二階から誰かが起きてこの部屋に来たことを意味し、それは同時に泥棒にとって致命的なアクシデント。タイミングも悪く、よりによって箱を登ろうとして人目に簡単にく瞬間だった。

灯りを点けた中学生程度の女の子は、泥棒と視線が合い凍りついた。そして近所迷惑ながらありったけ叫ぶ。

「キャー！ー！！ お父さんっ、来てー！」

泥棒は困惑した。この状況は過去にないものだ。逃げようにも女の子はリビングへの道に立っていて塞がれている。

たちまち「何だ、どうした」と眠そうな声が聞こえ、体の大きな男性が現れた。父親に違いない。

父親は泥棒を見ると娘に監視を命じ、自分はその間、新聞紙を丸めて棒を作っていた。

忍び寄る父親。泥棒は辺りを見渡して逃げ道を探すが、床に落ちた目的物を見つけて飛び付いた。

だが、目的物を得た代償は大きいものだった。父親の振りかざした新聞紙により体を叩き付けられたのだ。

痛みに体が痺れる。それでも目的物と腹の先端に付いた卵だけは守り抜いてやった。

目的物を口に咥え、持ち前の素早さで娘の足元に滑り込んだ。股を抜ける際、娘は再び叫んで怯える。父親は娘をどかして泥棒を追ひ、リビングへとやって来た。

出口である窓まであと少し。最後の関門である父親は、強力な武器を手にこちらの動きを待ち構えている。もう娘は敵じゃない。

力の及ぶ限り速く走り窓へ一直線。父親は二度目の攻撃をしかけてきた。

その一振りは見事命中。泥棒は新聞紙の棍棒に叩きつけられ、宙を舞う。右足が千切れそうだ。

父親は止めを刺す為に再度棍棒を振りかざす。その隙について、目的物を咥え直して走り出す。

泥棒は瀕死状態で窓から飛び降りた。庭にまで叩きつけられるが、父親はそれを見ると意外とあっさり追うのをやめた。

——やった！ 手に入れてやった！ 既に朝日が昇りつつあった心地よい蒼穹の下を歓喜と共に駆け抜ける泥棒。

私は勇敢に立ち向かった戦士だ。^{ファイター}見た目で嫌われたって、私には待っている家族がいる。

何個か潰されてしまったけれど、これから家族になる命だって腹の先端にある。生きる為、唯それだけの為に走る、走る。

近隣の畑まで泥棒は逃げてきた。そして自分の住処へと入る。あの家のように扉なんて邪魔なものはない。

そこで待っていた多くの子供達に、目的物であった腐りかけの野菜の切れ端を分け与えた。

でも間に合わなかったのは自分の命だ。右足の一つは走っていた間に取れてしまい、その場に倒れ込んでしまった。

腹の先端に付いた卵だけは切り離し、往生を悟る。子供達にとって

自分は、勇敢な戦士であっただろうか。

そう思ってくれば幸いだ。これからは、自分達の力で生きていくんだよ……。それと、あの家には行ってはいけないよ……。

黒き勇敢な戦士は息絶えた。多くの命を救って。

ブラックファイター（後書き）

テーマは「嫌われ者」。戦士の正体は、皆さん嫌いな台所の黒き悪魔（G）です…。

正体がわかってから読むと笑えるかもしれませんが。短編の方にも投稿した作品です。

星になった宇宙人

宇宙……それは何処までも続く謎の空間。哲学的なことはどうでもいい。

謎の空間の片隅、銀河と呼ばれる群れの中で申し訳程度に浮いている緑豊かな星がある。

大きさは隣の星に負けているようなくらい。特別変わっているというべき点は、有機体が存在することか。

星から言わせれば最近の話だが、たまたま海中で炭素同士が纏まって小生意気にもソレは蠢いたそうだ。

星が言えることでもないが、ソレは知能も持たずプチプチ分かれて数だけは増えていく。

いずれソレの大きさは増し、ウネウネしてるだけだったものが知能を持って移動する。

そこから何だかんだ奇跡が起こって複雑な構造になり、生意気にも星の中で覇権を争おうなんて考え始めた。

中でも自分で自分のことをヒトと自称する炭素塊は目を見張る成長だった。スーパールーキーである。

文明を築いていったヒトは、どうやら最高権力者の座に落ち着いたらしい。らしいだけ。

この緑豊かな星の住民の中の一人のヒトは、単なる炭素だった頃のヒトに似た姿のウィルスとやらの寄生され倒れていた。

知り得る限りの知識で仲間のヒトが看病を続けたが、それも虚しく病床のヒトは動きを止めてしまった。

するとどうだろう。ヒトの頭から意識だけが空を飛んでいったのである。

形ある体は地面に埋められて果てたが、何処かへ飛んで行った意識というものはどうなったのか。

実は意識は空を超えて宇宙まで飛び出していった。生物の行動範囲の極限を超越していたのだ。

星を包むあんな層やこんな熱い層を何てことなく通り過ぎ、意識は故郷から遙か遙か遠くへ飛んでいく。故郷は上から見ると緑で一杯だった。

さながら生まれたばかりのソレのように、知能もなくウネウネ。

やがて動きは何故か止まり、意識は実体化して凄まじい光を放ち始めた。

周りを浮遊していた岩やチリは光に吸い寄せられて、大爆発。宇宙は元の静寂を取り戻す。

とんでもなく熱い大きな岩がそこにあった。

岩にはまだ意識が残っていた。故郷も見えない所まで何故か飛んできてしまった。

お隣さんは何光年も離れていて、体温も下がる一方。比例して寂しくてたまらなくなった。

何十億年、やる気もなく唯そこで生きていたのだろうか。他の岩が衝突して一部が剥がれた時も無反応の星。

はっと思い付いたのは、故郷の美しい姿だった。

一面に広がる緑。今や故郷と同じ存在になった自分も、あんな風に家族を作れたら。

……頑張ってみよう。

海と陸に分かれ、体温を落ち着かせる。近くにあった燃える星がそれを調節してくれた。

ようやく炭素同士が結びつき、たまたま生き物ができた。次々と繁栄していく息子達を、星は意識の中で微笑んで見ていた。

故郷もこんな気持ちだったのかと嬉しくなる。遂に進化の過程でヒトも生まれた。

そんなある日、息子が機械に乗って剥がれた自分の一部へ行くことができた。生きたままで。

星にはそれが何だか解らなかったが、その技術は短い間で見事に進歩し、かなりの距離を機械で移動できるようになる。

今、息子のヒトが別の知的生命体を探す為に故郷の方角へ出て行った。

もし辿り着けたら、故郷に自分のことを自慢してくれると嬉しい。

あなたの息子だった一人が、こんなに賢い息子を持つようになったのだと。

ヒトはその橋渡しをしてきている。親孝行の一つだと、勝手に思った。

一方、ここは故郷の星。一人のヒトが一面の夜空を見上げた。青く輝く一粒の光があった。

星になった宇宙人（後書き）

テーマは「誕生」。「ブラック・ファイター」に似た展開です^^；
宇宙がこんな感じだったら夢があるな、と思って書いたものです。
短編の方にも投稿した作品です。

無為

これこそ暇と呼ぶのだろう。

天気は晴れ。特に何もすることは無い。誰も来ない。

病院の個室に一人の高校生が寝ていた。寝ていると言ってもベッドに横になっているだけ。

ベッドは窓辺に置かれていて、ここ4階からはいつもの街が見渡せる。

本当ならば学校、昼休みが終わる時間。

しかし彼は登校中に自転車に乗っていて転び、右足を骨折。数日前から病院に缶詰状態だった。

時計を眺めたまま意味もなく静止。これから午後の授業なんだろうな、と意味も無い思いに更ける。

欠伸。続けて、欠伸。

涙が出そうだったので、出せるか挑戦。

出た。落ちる前に拭う。暇になった。欠伸が出る。

どれだけ脳は酸素を欲しがっているんだ。こんなに暇なのにフル稼働している筈はない。

たまに両親が見舞いに来るが、平日ともあって早朝に母親が来た。学校もいつも通りやっている。

つまり話相手はなし。誰かが来ることは望めない。

唯一の趣味……という程でもないが楽しみなゲーム機も、母親が持

つてくるのを忘れて今はない。

運動も足がこれでは何もできない。その前に苦手だ。むしろ才能が開花したこともない。

勉強。定期テストは終わったばかりだ。なんて無難な、成績に差し支えない時期の事故なのか。

じゃあ、寝る。だが、母親が来た後から昼飯の間も寝ていた。寝飽きた。

彼は突然むくつと上半身を上げる。右足は包帯を巻かれ固定されている。

何となく窓の外の世界を眺めた。忙しく往来する、国道を走る車両の数々。

信号が赤になった。何となく赤の時間を計測。十八秒。青はそれより長かった。

赤に変わり、目を閉じる。十八秒目前で開くと、ジャストタイムだった。

人間は暇過ぎると奇行に走ることがあるという、どうでもいい事実が判明した。

やはりこの計測結果は間違いではなく、彼はまたしても突然、部屋を見回し始めた。

思えば個室である。両親も意外と気を使ってくれていたようだ。

そういえば転んだ時、一緒に自転車登校していた友人が尽くしてくれた。

遅刻しただろうに。対応も手際良く素早くやってくれた。

看護師のおばさんは、無愛想な自分に何度も話しかけようとしてくれていた。その度にテキトーな返事。

本当は無愛想と言うより人見知りなだけだ。それも悟られていた気がしないでもない。

彼は何の変哲もない真っ白な天井を見上げた。

怪我をすればすぐに病院。程度は大きいかもしれないが、なんとも先進国っぽい。

高校も一応進学校に行けた。多分大学も行くことになる。

進学校だから親からもバイトをしなくていいと言われ、親のスネの許容範囲をかじって生活している。

何ともない顔で。

涙も、欠伸の涙しか出てくることはない。相変わらず暇に変わりはなから。

暇だ。

これを暇と呼ばない者はいない筈。

でもそれとは対照的に、脳はまだ先程の奇行の様なことを思い出そうと息を荒げている。

その度に涙ぐむ。

今回は涙を出そうとした訳ではないのにベッドへと落ちた。

そしてふと静寂の中で気がついた。

暇過ぎるって、幸せ過ぎる。

別段、輝かしい人生ではなかったが、輝かしい人生ではないだろうが。

「なんだ、俺。なかなか恵まれてんじゃん」

無為（後書き）

テーマは「幸せ」。自己投影かも。

自分は不幸だなんて思っても、世の中にはそれ以上に不幸な場合の人もいるもので、あまり口にしてはいけないかもしれませんね。短編の方にも投稿した作品です。

うやむやあやふや

彼は大学生。

人の流れに従い、普通に生きてきた。現在は残り数年の学生時代を謳歌している。

大学は自宅から遠くなく、バイトもしてはいるがこれも近所だ。

「ただいまー」

返事は期待していないが、その通りだった。寂しくバイトから帰ると、彼はすぐに一階のリビングに寝転がった。

とんでもなく日常。電源の付いていないテレビの画面に自分が映る。自分の背後に、とんでもなく非日常なものが無造作に置かれていることに画面を通して気付いた。

当然だった。驚いて振り返ると、机上には何やらモヤモヤした「物体」……と言えるのかさえ不明な代物があるのだから。

一言で言うならばそれは、“モザイク”。

テレビで見せられないものに局が自主規制として施す、あれである。だがこのモザイクはプラスチックのパックに収められている。

「母さん、これ何？」

何処にいるのか解らなかったが母親に尋ねる。母親は隣の部屋からのこのこと寄ってきた。

「ああ、それ。流行ってるらしいから買って来たんだけど、私には使い方が解らなくてさ」

母は目新しいものを好んで買ってくる。今や使い道のなくなったガ

ラクタも多い。

「またかよ。どうせ信憑性のない売文句に唆されただろ」

母親は苦笑いだ。自由に使っていていいと言い放って元の部屋に戻る様子から、凶星に間違いない。

使う、と言っても何に使うものか知らない。とりあえずパックを開き、モザイクに触れてみる。

妙な感触……。指二本を使って摘まみ上げると、空気のように軽いその空間はパックを離れた。持てる。

しかしどうしていいものか。パックに放り戻すと、この物体の性質が解った。同時に恐怖を覚えた。

摘まんだ指先がモヤモヤして見えるのである。拭おうとして服でこすると、服には薄くモヤモヤが移ってしまう。

「意味わからねえ。何なんだよこのモザイク……」

それ以上モザイクには触れず、気にはなりながらも一日を過ごす。翌日の大学、空き時間。またも驚かされることがあった。

親しい友人が、目の辺りにモザイクをかけて自慢をしてきたのだ。その容貌はさながらテレビに移る容疑者。対して友人は完全に引いている彼を見て笑う。

「これ、面白いだろ！ 俺には目の前がしっかり見えてるんだ、どういう仕掛けなんだろうな！」

「お前、それなら俺も持ってる！ 見ろ、未だに指先が霞んでる」

彼は昨日から治らない二本の指を友人に見せた。

母親は流行っていると聞いて買ってきただけだったが、まさかあんな有用性の無いものが本当に流行っているのだろうか。

まだ若者でありながら、現代人のセンスに置いて行かれた気分を味わった。

友人は言う。

「他にも持つてる奴ならいるみたいだ。近々流行するぞ。なんて言うかそう、心が大きくなった気分がする」

友人は彼にモザイクを勧めてきた。彼には暗闇を手探りで歩き回るような未知の恐怖が増してしまった。

何故だか恐怖よりも小さな好奇心が打ち勝ち、家で彼はモザイクを目の辺りに塗ってみた。

これで周囲からは目がぼかした状態で見られる。つまりそれは、人の目が気にならないということでもあった。

モザイクはメディアに取り上げられる等して、世間一般に本格的に普及し始めた。

その勢いは疾風迅雷。瞬く間に人は一部をモザイクにすることが普通となった。

中には新たな効用を発見する者までいた。手術して喉に塗れば、声までぼやかすことができたのだ。

彼も流行の例に漏れることなく流れの一滴になっていた。

そして全身にモザイクをかけた者まで現れる始末である。

否、むしろモザイクなしの素肌などみっともないと言われる段階ま

で上り詰めてしまう。

こうなっては彼も全身に塗る他なかった。世間がそうさせたのだと勝手に理由を付けて。

人の目が気にならないそのモザイク流行は、凶悪な犯罪をも促した。荒廃していく治安。彼は遂に心配になり始めた。

モザイクが世界を侵略しているのではないかと本気で思う程に。

そんな中、彼はあの友人とコンビニへと来ていた。

モザイクだらけの雑誌を読んでいた彼は、横目で万引きをする友人を見た。

モヤモヤでも解った。服の中に商品を忍ばせている。

「おい、何やってんだ……早く元に戻せ」

店員に気付かれないよう小さな声で警告。

「バレねえよ。気付かれても構わねえし」

彼は凍りついた。雑誌は掌から滑り落ちる。こんな、こんなで良い訳がない。

訳の解らないモヤモヤに世界が食われてしまっているのだ。あれは劇薬だ。

「こんなの、おかしいだろ！！俺は、もうこんなもの必要ない！初日にこすれば薄まることを知っていた。世界を救おうなんて大層な考えはなかったが、世界を救う最初の一步になればそれでいい。

彼は思い切り顔を掻き続けた。友人は尻もちをついて「やめろ！」

と叫び続け、後退するばかり。

この時、久しぶりに周囲の目が気になった。モザイクを外すことは恥ずかしいなんて思ってしまったている。

そして遂に頬の肌が新鮮な空気に触れた。

「全てを隠す必要なんてない！ お前にだってできる……」

世界が消滅した。真っ白に。

そこに丁寧な黒い文章が浮かび上がった。

【大変お見苦しい映像が流れ、誠に申し訳ありません。復旧まで、暫くお待ちください。】

うやむやあやふや（後書き）

テーマは「現代社会」。若干ホラー気味ですね。

実は現代のパソコンや携帯電話への皮肉が込められています。皮肉であって批判ではありませんよ。短編の方にも投稿した作品です。

リビングデッド

夕刻の都市に場所を取る寂れたビルがある。

今や物音一つなく静まり返ったその壁は、西日に照らされて周囲に大きな影を落とす。

屋内もこの時間には暗黒の世界だった。

珍しく何かが階段を上る足音が悲しく響くが、それを聞いた者は誰もいない。全てが闇に掻き消される。

足音はひたすらに上だけを目指し、最上階の踊り場で止まった。

屋上に出られる古びた扉、その取っ手に指を掛ける。

弱々しく、中学生くらいの少女が扉を開いた。眼前は最も強い時間帯の夕日に彩られていた。

その眩しさに少女は目を細める。コンクリートの床に、よくある類の緑のフェンス、そして……

案山子^{かかし}がいた。

「あった」のではなく、「いた」。

全体重を支える木製の棒は、畑ではなくコンクリートを割ってめり込んでいる。

当然の景色の中に、ただそれだけが不自然に佇む。

少女は何ともない顔で歩き始めた。視線だけは案山子に向いている。よくある「へのへのもへじ」の顔、古ぼけた感じの漂う縫い合わせだらけの布で出来た胴体、真横に広げた両腕。

目を表す「の」と少女の目が合った気がして、彼女は急いで視線を背け前方に向けた。

少女には案山子が何処となくやつれているようにも見えていた。当然、表情は伺えなかったが。

何か過去に悲惨な経験をしてきた感じがする。

性別は男性。年齢は人と言う三、四十代か。

しかしやはり、そこにいるのは案山子である。

少女はフェンスへと向かっていた。網に足を掛けてよじ登り、とてつもない高さの端に来た。

ゆっくりと慎重に下を覗き込む。遥か遠くで豆粒大の車が往来している。

現実はそのような景色。それが少女には違うように見えていた。

渦巻く都市。やがて景色が混じり合い、そこには謎のワームホールが見えている。

ようやく彼女の表情が動く。引きつった笑顔だった。

唾を飲み込む。大丈夫、このワームホールの先に繋がっているのは、きっとファンタジーな異世界。

次の一步を踏み出す事でその世界へ旅立てる事を、彼女は知ってい

る。それは誰でも知っている事だ。

靴を履いたままでも気にしない。異世界への一步を踏み出した。

「君、ちょっと待ちな」

少女の耳に声が勝手に入って来た。声が脳に届いた時、視界が一変する。

とてつもない高さだった。傾いた体は既に宙へ浮いており、落下と紙一重で腕をフェンスに伸ばした。

動きが止まる。指は網に引っ掛かっており、少女は恐怖で胴体をフェンスに引き戻した。

頭は真っ白だった。呼吸だけは早い。生きている。

「まあ逝く前に聞いてくれ。俺も君と目的を同じくしてここに来た者だ」

何かが話し掛ける。周りを見渡しても人はいない。案山子はいた。フェンスを乗り越えて案山子に近寄る。今度はこちらから。

「あなた、ですか？」

案山子は口を表す「へ」の辺りから、どうやってか声を出していた。

「ああ。俺も飛び降りしようとしたよ、人間の姿だな」

「の」の字が少女を凝視していた。案山子は語り始める。

「俺はフェンスの向こう側で、足がすくんで踏み出す事すらできなかった。

気付いたらこのザマだ。情けないよな。だからこんな所に来たのかもしれないね。

君とオッサンには決定的な違いがある。俺の言ってる事が解るかな？」

首をかしげた。飛び下りれば楽になれるのに、何故か今は案山子の話に聞き入っていた。

それはまるで救いを求めるように。

「俺は案山子で君は人間のまま。人生でやっと脚光を浴びられる瞬間だったのに、それすらも俺は無駄にしちまった」

夕日は半分沈んでいき、案山子の顔に影を落とす。

「知ってるかい。人間は自ら死を望む事のある唯一の生物だそうだ。案山子は人間の成り損ないに与えられる姿なんだろう。

俺なんかにはもったいないくらいの称号だな。

質量があって生きてはいても、中身が死んでる。だから感情も要らないのかねえ。

人間は第三者なしに自分というものを証明できない。誰かに認められなければ、爪弾きにされてしまう。

人間の姿で生きてはいるが、人間として必要な事を失った。それが案山子であり、生ける屍だ」

案山子は悲しい真理を表情を一つも変えずさらりと話している。

「君は一步を踏み出していた。それ程の勇気があれば、今のままで

も生きていけるんじゃないかな。
扉をまた開けて、現実へ帰ってやりな」

少女は涙を流して頷いた。先程までの行動が嘘の様に迷わず、言葉に従って扉の前まで来る。そこで唐突に振り返った。

「どうした？ 大丈夫だ、君なら安全に地上へと戻る」

「おじさんは？ おじさんはどうするの？」

「オッサンなんか気にすんな」

少女は涙を思い切り拭うと、初めて見せた笑顔で叫んだ。

「私の勇気を止める程の優しさが、おじさんにはある。

それ程の優しさがあれば、おじさんも生きていけるんじゃないかな」

「どういたしまして。でももう手遅れ、俺は案山子^{リビングデッド}だ。地に埋まった足じゃ歩けない」

「私は……おじさんを案山子としては見てなかったよ」

少女は百八十度向きを変え、扉を開けて闇へと消えていった。

夕日は沈んだ。これまでよりも更に静かな夜が訪れた。

ただ、扉は完全には閉まっていなかった。

宵の都市に場所を取る寂れたビルがある。

その屋上には、中年の「おじさん」が直立し、腕だけ真横に広げて佇んでいた。

彼は両腕を下ろす事ができた。

リビングデッド（後書き）

テーマとしては「人生」。タイトルは案山子を意味しています。なんだかこれまでになくハッピーエンドです。そしてハートフル。短編の方にも投稿した作品です。

考えない輩

君たちは将来、何になりたい？

大富豪！

そうか、大富豪いいよね。憧れるよね。
何でも手に入るからね。

地球の支配者！

支配者、格好いいよね。全部思うがままだもんね。

じゃあ宇宙の支配者！

でもどうするとなれるのかなあ。
解る訳ないよね。

大富豪！

大富豪？

大富豪って凄い。僕も大富豪なろうかな。

じゃあ、どんな人が好き？

偉い人！

偉い人いいよね。
何でも解るもんね。

大富豪の成り方も解るかもね。

大富豪！

そうか、大富豪と結婚すれば早いね。

君って偉いんだね。

優しい人！

やっぱり優しいといいよね。

お金じゃ買えない事だもんね。

……あれ？

何か変だけど……まあ、いいよね。

じゃあ、僕の事どう思う？

とんちんかん！

あー、自分でも感じる事はあるよ。

大富豪！

僕は大富豪なの？

夢を変えないといけないなあ……。

ゲジゲジ！

僕、ゲジゲジ？

ああ、そうだった。

僕、ゲジゲジなんだよね。

他には？

ブラックファイター！

何それ、初めて聞いた。

格好良さそうだから、それを新しい夢にしようかな。

ぷっ…

何、どうしたの？

アッハハハハ！

おい聞

こえるだろ、フフ…

どうして皆で隠れて笑うの？
僕には教えてくれないの？

大富豪！

大富豪……？

大富豪いいよね。

うん、素敵な夢だと思う。

なあ、

まだ言ってるのか。

どういう意味？

お

前、質問ばかりだ。

結局、お前は何が好きで

何になりたいんだよ。

それは、ブラック……。

付和雷同っ

て言葉、知ってるか。

知らないけど……何となく、自分で調べるよ。

大富豪！

「違う！ 僕は、僕が決める」
やっと自信を持って言う事が出来た。

考えない葦（後書き）

テーマは「意志」。人に頼ってみるのも悪くはないが、やる時はやれって事ですネ。

今回は『文章が映像に勝る点の探求』という裏テーマを持って挑みました。

パソコンでの閲覧をお勧めします。

人通力

君は白い墓の前で泣いている。

芝が一面に生えた美しい平地に、無数に並ぶ西洋風の墓の数々。僕は彼女の背後で存在感無くうつすらと立ちすくむ。

辺りには誰もおらず、墓地に居るのは彼女だけだった。

添えられた花束と新しい墓碑に、顔を覆う両手の隙間から雫を落としていた。

彼女はその場に崩れたかのように座り、泣き声を出さずにいる。むしろ出せずにいる。

僕は表情さえ伺えない彼女の心の内側が黙視できた。俗に「千里眼」と呼ばれる、隠れたものを見通す神通力である。

僕は彼女の心に隠されている真意を透かし見た。

今は誰かが傍に居てやらなければならないと解った。

肩に手をやると、彼女はそれを払い除ける仕草を見せた。

「一人にさせて」

独り言を呟いたが、僕には見えている。

彼女はそう言いながら、本心では自分の言葉を押し切っても誰かに居て欲しい事を。

僕は黙って彼女の隣に腰を下ろし、深い溜め息を漏らした。

『…………ごめん』

彼女は依然として顔を手で覆い隠していたが、僕はそれを見れずに

墓ばかり眺めて言った。

「・・・・・・・・ばか」

『慰めになってないよね・・・・・・・・ごめん』

静寂が聞こえ、僕の心に響いた。痛ましい沈黙が続いた。独り言を言い合っている感だ。それでも彼女の傍に居てやらなければならぬ。

思い切って沈黙を破る他になかった。

『顔を上げれば、僕が居るよ』

「もう、逝っちゃったんだね・・・・・・・・」

『僕は千里眼を持っている。人では、なくなったから。実は誰でも持っているんだよ。本当は神通力なんかじゃないんだ』

彼女は顔を上げ、誰も居ない所に座る僕を見た。

『だって、人は相手の気持ちになって考える事ができる。君には僕が見えるだろう？』

本当は見えないのに、君だから見えるんだよ』

彼女は涙を拭い、僕を見た。日は沈みつつある。

『いつでも会えるから。さあ、立って』

彼女は僕の声に呼応して頷いた。初めて会話をした感だ。立ち上がって墓を一瞥し、彼女は去っていく。

「また来るからね」

僕に背を向けたまま言い放った。

『うん、ありがとう』

彼女の姿が見えなくなるまで見送ると、僕は墓前で消えていった。

人通力（後書き）

テーマは「絆」。珍しくほのぼの系でしょうか。

あえて「僕」の括弧を変え、彼女しかいないような表現をしています。何故かは墓が誰の墓か解れば同時に解る筈です。タイトルは神通力と掛けた造語です。

お金はおっかねえ

今日は親しい友人と一緒に飲食店へ。珍しく私のオゴリだ。
チェーン店という訳でもなく、至って普通の店。腹が減り、どこでも構わなかった。

中は古ぼけた感じのする雰囲気漂わせていた。

シミの落ちなくなった白い壁、年代物のカウンター、品書きは油性マジックで手書き。

カウンターの向こう側ではボーっとしたような若い女性店員が一人で調理を続けている。

客は自分達の他に一人。しかし、その男の恰好は周りとは釣り合い。腰に本物かどうか疑わしい剣を下げ、革の鎧を装備、マントらしきものを身につけている。

言ってしまうば、旅人。

私はこの店に妙な違和感を覚え、友人を見たが無反応。彼は何の疑いなく女性店員に定食を注文した。

「……あつ、俺も同じ奴で」

釣られるようにとりあえず注文した。女性店員は旅人に料理を出す
と、定食二つに取りかかっていた。

「この店、なんか馴染めないなあ」

私は友人だけに聞こえるように小声で不満をぶつけた。何が、と返されれば返答はできない。

「そう？ 俺は別に気にならないけど。それより、太っ腹さん頼みますよ？」

「わ、解ってるよ」

太っ腹、要するにオゴリの話だ。勿論、一度言った事を撤回するよ
うな無様な真似はしない。

ふっと横を見ると、汚れた壁に可笑しな張り紙を見つけた。

『マイナス10%割引中!!』

おそらく、イタズラか何か。気にしてはいけないオーラが匂っていた。

旅人より先に完食し、カウンターに向かう。友人はそれを見ると店
を少し出た。

どうせ気前のいい事をしているのだ。私は少し格好つけてみた。

「釣りは要らねえよ」

私は愚かな自己陶醉をし、意気揚々と店を出る。あと一步で店の外
へ出る時、背後から店員の呼びとめる声が聞こえた。

「お客様ー、10円足りないDEATH」

私は足を踏み出す手前で凍りついた。とんでもなく格好悪いミスを犯してしまったのではないか。

いや、持ってきた金額より少しだけ定食二つの方が安く済む筈。それでこの店に入ったのだ。

——嫌な事を思い出した。あの張り紙……イタズラではないというのか!?

「はは、は、ははは、は……」

振り返って無表情の店員に無理な作り笑い。余計に場がシラけてしまった。

もう金は持っていない。精神的にも絶体絶命のピンチに、私は救世主を思い出した。

店の外にいる友人を頼る!

「悪い、家に帰ったらすぐ返すからさ、10円だけ貸してくれない?」

彼は財布から10円玉を取りだす。救われた。

「今、ギザ10しか持っていない。50円で返せよ」

二度目の凍結。背後の店員の視線が辛い。

私は友人を引きいれ、後ろを向かせる。膝カッコンを命中させ(2500ダメージ!）、友人は膝から崩れて昇天した。

急いで遺体を死角に隠し、今度は旅人の元に向かう。

「すみません……10円貸して頂けますか」

「あの、今10ゴールドしか余ってないのですが……」

？

??

?????!???

10ゴールドってどういう単位なんだ……

この旅人は中身までRPGなのか……

モンスターを倒したら落としていったとしても言うのか……

しかし、だ。他に道はない。私は連絡先などを済ませ、店員に見た事もない金色の硬貨を出した。
やっとこの地獄のような空気から解放されるのである。

「お客様ー、申し上げ難いのDEATHが、まだ足りていません」

……。

10ゴールドって10円の価値もないのか……

土下座。

40円が為に友人を帰らぬ人になどしなければ良かった。後悔先に立たず。

旅人が食事を終え、店員に1000ゴールドを払って言い放つ。

「釣りは要らねえぜ」

店員は顔を真っ赤にして口に手を当て、友人のように膝から崩れ落ちた。

「ス……ステキ……!!」

旅人は出ていく。あの野郎、弄びやがった!!
店の中で立ち上がる事のできる者はいなかった。

お金はおっかねえ（後書き）

テーマは「お金は大切」。呆然とするのが一般人の正しい反応です（え

唐突な路線変更でギャグに走りました。

アトランダム・キューブ

努力より遥かに巨大で才能よりずっと重いもの。
大事な時に役に立たないもの。

それを司る一天地六。人には不可侵の領域。

この一投は絶対的運命を義務付ける。
何物をも凌駕する可能性、逆もまた然りの大博打。

その立方体から目を逸らすな。逸らした時点で敗北なんだ。
そのメから目を逸らすな。逸らした時点で言い訳にするんだ。

紅い一つメに怯えながら血眼で投げていた。
あの領域に手をつっ込んで手繰り寄せたサイコロ。投げてみた君。

何処かの天才が言った。

『99%の努力と1%の才能』と。現実はどうだろう。

「99の才能と偶然、1の努力で成り立つのが世界」
……そんな熱論を展開したところで、誰だって解ってる。

元々100も可能性は持っていない。
人にとっては巨大な「1」を活かし切れていないだけの話。可能性の何割かを占める程に大きな「1」。

君はなるべく多くのメを望んでいた。誰だってそう望む。
しかし君は事実を知ってしまう恐怖に負けて横を向く。

君が投げたサイコロなのに、いつの間にか蔑ろじゃないか。
結果まで責任持てよ。

『賽は投げられた』、君の血が通うこの手で。

君は恐る恐る目を開けた。決して芳しいとは言えないメの数。
さあ、どうする？

これから起きる「1」の努力不足にこじつけるつもり？
そうして逃げるのか？

……現実はどうだろう。

君はサイコロを投げ捨てる。

何度投げたって結果は同じかもしれない。

どの面も見ってしまったメの数と同じ数かもしれない。

もう知る事はない事。

君には関係無くなった事。

サイコロにはラッキーもゼロも無い。

「1」を尽くす他、人は何も出来ないのだから。

アトランダム・キューブ（後書き）

テーマは「運」。運は人に変えられない。だから自分に出来る極僅かな努力を惜しまないように・・・というメッセージ。
タイトルの訳は「無作為な立方体」。

東雲のネクロポリス

月明かりに照らされる臨海。

遙か昔に滅び、今は海水に浸る廃墟群に一人の青年が訪れた。

彼は息が詰まった。

自然を前にして、自然により生まれた存在なんて取るに足らない。そんな忘れつつあった当然の事実、その緊張が彼の氣道を一時的に止めたのだ。

地上は三十センチ程度まで浸水して海と繋がり、白で統一された建物には植物が縦横無尽に跋扈はつこしている。奥にそびえる時計台は時を刻む事を忘れ、街は時間という概念を失くなしてしまったような景色である。

人が住んでいた頃の町並みは美しかったのだろうが、今は幻想的という方がこの場には合っている。

青年は我に返ると、裸足で海水を掻き分けて街へと入って行った。腰には日本刀に似た剣を据え、格好は決して整えているとは言いがたい。むしろ何処かみすばらしい感じさえ漂うフード付きの上着を身につけている。黒髪に目の色も黒、景色に同化していた。

寂れたゴーストタウンに水の音だけが聞こえる。青年は左右を高い空家に囲われた大通りから横の一本外れた通りに出た。

天を仰ぐと渡り廊下で繋がった高い空家と三日月。弱い風が何処か

らかやって来た。

彼は剣をすぐにでも抜刀できるように柄に右手を添えた。何か、大きな動くモノが近づいている……？

突風が巻き起こった。突然の出来事に目を瞑るが、着地した水音と同時に風は止んだ。

背中から七本の龍の首を生やした白い毛の獣がいた。直立して目はなく、腕は身長と同じ長さ。本体は二メートル程。

「化け物みたいな外見という話は聞いてはいたが、まさかな」
怪物は剣を抜いた青年に向かい、しっかりとした声を発してくる。

「それは酷い言われ様だ。こう見えても、私は天使なのだが」

「俺にはどちらかと言えば悪魔に見えるぜ」

「見かけで判断しては良くない。翼と頭上に輪がある天使は、一部の地域のみ。天の使いがどんな容貌だろうと不思議ではないだろう」

実は近隣の街から化け物の目撃情報が出ていた。青年がこんな辺境の地へ訪れた事には理由がある。

「悪いが討伐の依頼が来てねえ。話してばかりもいられないんだよ」
青年は剣を構えた。

「ほう。では最後に聞こう」

「日は昇ると、思うか？」

「死ななければ昇る日を見れるんじゃないか？」

刹那、怪物の背中の龍が凄まじい早さで青年に体当たりした。青年は飛ばされて空家の壁に打ち付けられる。攻撃は尚も続き、他の龍は左腕に噛み付いた。

「ううッ！」

鮮血と痛みで嗚咽が漏れた。咄嗟に右手の剣で噛みついたままの首を刺した。首からは血が出なかったが、龍は腕を離し動きを止めた。

更に別の龍の首が体当たりを仕掛けてくる。青年は立ち上がり、空家のドアを破って中へ逃げ込んだ。

怪物の本体は無言のまま背中の龍を操り、古くなった空家の壁を破壊しながら青年を追わせた。

二階まで走った青年が後ろを振り返ると、階段下に龍の首が既に来ていた。首は再び突進してくる。

殺風景な廊下を走って逃げると、壁を貫いて別の龍が進行方向から現れる。彼は逃げ場を失い、突進する二頭を交わす様に窓を突き破って外へ出た。

龍の首は激突し合って止まるが、他の首が一斉に空家へと体当たりして家を丸ごと倒壊させた。

大通り側に出た青年を、怪物は先程まで家のあった場所から見つめている。終わりだ、負ける。悪夢だ。

「捕えた」

青年は死を覚悟した。逃げ場のない大通りで勝てる相手ではない。剣を落とす。

「終わらせろ……歓迎してやる」

息も絶え絶えで発した言葉は、最後の強がりだった。怪物は龍の首一本を突進させる。

日が昇った。廃屋に朝が訪れた。

龍の頭は青年の目の前で止められていた。本体は目のない顔で笑みさえ浮かべている。

「素直になったじゃないか。今日という日も、お前を迎え入れてくれたようだ」

化け物は唐突に薄くなり、消滅した。青年は仰向けに倒れる。

あの怪物が何だったのか、依頼にあった化け物なのか解らずじまい。しかし、青年は左腕の痛みからなのか、生きている事を強く実感した。

日は温かい。迎える事が当然だと思っていた「明日」という日は、そうではなかった。

おそらく普通に過ごしていたら気付かなかった事。死に際に立たされて、生き残って、こんなにも思い知らされるとは。至極当然の、“自然”の出来事を侮っていた。

「そうか。あの怪物は……」

時計台の針は、何時の間にか進んでいた。

東雲のネクロポリス（後書き）

テーマは「生」。天使さんをおぞましい化け物で描きましたが、自然（当然の存在）を具現したものです。

戦闘・水没都市などいろいろ盛り込んだ結果です；
かなぐり久しぶりの投稿です。

キャラバンの行き先

見渡す限りの砂漠。砂、砂、砂。

空は馬鹿の一つ覚えと言える程に蒼く澄みきっている。雲さえ嫌うこの一帯に太陽は無情にも照り続けるのみ。

これといった道はない。旅人は方角も定かでないまま進むのである。

旅人は列をなして歩いていた。キャラバンの様に見えるが、一人一人の顔を見てみるとその異様さが解る。

全員、同じ顔をしている。

行列は綺麗に一列に並び、同じ歩幅で前の人間に当たる事はない。

先頭は遙か先であり、既にここからは見えなくなっている。後ろも同じであった。

その内の一人が後ろを振り返る。何処までも並ぶ自分。足は決して止めない。

無意味だと理解しながら、彼は記憶にほとんど残っていない旅路の始めの頃を懐かしむ。

「あの頃は楽だったよなあ」

思わず漏れた愚痴。まさか“ここ”がこれ程までに厳しいとは思っていなかった。あの頃はオアシスが無邪気に思い描いて……

記憶に薄いあの頃を考えても、釈然としない不満は拭えなかった。もう少し“ここ”に近い列の人を考えなければ、そしてその不満を口にせずにはいられなかった。

「あの時は歩き続けるのが楽しかったなあ」

大きな溜め息。しかし列から外れると、この広大な砂漠では危険だ。結局は前を歩く人に従い歩幅を合わせる。

「ふざけるな。俺だって悩みも不安もある！ お前と同じなんだよ・
・・・・」

驚いた。返事が返ってくるとは思ってもみなかった。忘れていた。自分は常にその場その場を苦しみながらも歩いてきた。

そして今がある。“ここ”を歩んでいる。

その時、列の前を歩く人間がすぐ後ろを付いていく自分に振り返る。

「あの頃は楽だったよなあ」

先程、自分が後列の者に発した戯言そのものだった。いつまでも後列の人間にこんな事を思いながら歩き続けるというのだろうか。それは嫌だ。

彼は列から外れた。同時に前列を歩く自分の顔をした者達が消滅する。自分が先頭になったのだ。

一度立ち止まり、再び後列を振り返る。こちらには自分の顔をした者達が残っていた。彼の停止に合わせて足を止めてくれている。

「そうか、俺はお前達を背負って歩いていたんだな。お前達の為にも、俺は歩くよ」

歩み始める。暫くするとまた前列に自分の顔をした人間の列が現れた。

その時、列の前を歩く人間がすぐ後ろにいる自分に振り返る。

「お前の為にも、俺は歩くよ」

前列の人間は自分の晴れ晴れとした顔をしていた。彼は笑みを浮かべて返事をする。

「当たり前だろ」

前の人は明らかに、返事に驚いた顔をしていた。彼の歩みは止まらない。

キャラバンの行き先（後書き）

テーマは「過去と未来」。少しネタ明かしますと、砂漠は生き難い現世。後列を歩く、多くの過去の自分の為にも、主人公は未来を変えたんですね。辛かったあの時を乗り越えた自分の為にも生きる。この行列はたった一人の孤独な旅なのです。

ZZZ

ZZZ・・・・・・。

睡眠時間、それは全生物にとっての至福。

それを味わう者がここに一人。大通りのど真ん中、一人の青年が仰向けになっている。

日中の日射しに照らされたコンクリートは熱を反射し、路上の温度は跳ね上がる。そんな所に焼肉の如く寝そべっているのだ。当然、そこを通りかかった人は皆その焼けた肉塊を避けるように素通りしていく。

見事なまでの放置。明らかに色のおかしい肉に食い付く者などおらず、遠慮したフリをして焦げるのを待つ。当たり前処理。

実際、彼の周囲半径2メートルくらいには誰も近寄らない。少し離れた安全地帯から指を指して話題にする者も多い。ただ、立ち止まってまで彼に関心を示そうとする人が居ないのだ。

あのアブナイ奴とは何の関わりもありません、という訳である。いつヒョッコリ起き上がるかも知れない不発弾、触らぬ神に祟りなし。

青年が何をしているのかというと、至って単純だ。

夢を見ていたのである。

有り得ない事が簡単に浮かび、誰でも自分が主人公。浅い眠り、い

わゆるレム睡眠時に見られる……方ではない。

有り得ない事が簡単に浮かび、誰でも自分が主人公。無垢なあの頃に見られる――将来像の夢である。

しかし、あまりに寝過ぎた。いつから寝ているのかさえ忘れてしまった。いびき響かせ鼻提灯、絶賛阿呆っ面公開中だ。ヨダレ、ギリギリセーフ。

予想だが、まず間違いなく傍観者は笑っているだろう。しかし彼には周囲からの笑い声は痛くも痒くもない。そもそも聞こえていないから。

寝ていても日は昇ったんだろう。そしていつの間にか勝手に沈んでいるものだ。誰にも迷惑をかけずに済んでいる。充実した睡眠生活。そういえば起こそうとする人も居ないらしい。

その上、現実逃避にモッテコイ。あの頃の叶いもしない将来の「夢」を見て過ごす。

（馬鹿だったなあ、何考えていたんだよ）

果たして心のその声は、誰に向けての事か。過去に向けた言葉の槍が、今の自分に向かって返ってくる。

「馬鹿だなあ、何考えているんだよ……」

こんな所に寝っ転がって、周りの扉を全てを遮断して。起きない理由も解っていた。現実を見ずに済むからだ。寝たって死んだ訳じゃない。身体は確かに現実の熱を感じている筈。みっともない。いい加減、目を覚まさないと。

大通りの青年が起き上がる。久しぶりの日差しに目が慣れない。周囲のざわめきが増す中、彼はその場に自分の足で立ち上がる。

金にもならない夢だと悟ったあの日、落書きのように思い描いていた夢を捨てた。「安定」と一緒に^{ふるい}篩にかけたら、綺麗に失くなるような夢。大人に近づくにつれ、馬鹿になっていったのかもしれない。寝ている場合じゃない。夢オチで終わらせない。

学校では教わらなかった夢の見つけ方。彼はまだ目が慣れていない中、手探りで進んでいく。

ZZZ（後書き）

テーマは「夢」。ありそうで今までにないテーマでした。ここでの睡眠は諦めや現実逃避の類です。タイトルの読みは「ズズズ」。久しぶりの更新でした。

陽の目を見ない唄

とあるステージの下
太陽も気付いてくれない程
真っ暗なこの場所で
ひたすら支える
それが自分の仕事
全部わかつてる

“ 誰もが主役に相応しい”
声に出して呟いた
誰にも聞こえないけど

ステージの上の主役
その人の熱い歌声
離れた所から観客の声援
自分には関係ない
興味もない

理由は簡単だ
自分にとってそこは陽が当たり過ぎている
今のままを望んでいる訳じゃない
こんな自分でも上の景色は見てみたいよ

“ いつか輝ける日が来ると信じてる”
本気で言ったのか自分でもよくわからない

いわゆる縁の下の力持ち
上の方はどうぞ歌っていてください
あなたは自分のことを知らないかもしれない
自分はあなたを知ってます
それでいいのです

腕が辛くなってきた
耐え続けるからまだここに居させて
理由は簡単だ
迷惑をかけないことも仕事です

“ 後で笑って語れる思い出話になるでしょう ”
慰める様に呟いた
惨めさには慣れている

ようやく太陽が顔を覗かせる
ステージの上は静まり返る
異変に気付いて顔上げた
マイクを持った人がいた

主役はマイクを差し出す
君も歌わないとダメだと
冷やかしたと思った
そこは自分の居場所じゃない
でも強引に渡された

縁の下を交代し
始めての大舞台へ
似たようなステージが沢山
観客はその景色の中
人の気も知らないで

笑われると思った
決して歌は上手くない
でも今更下がれない
ありのままの自分を
唄にするしか歌詞が無い

“ 誰もが主役にふさわしい
いつか輝ける日が来ると信じてる
後で笑って語れる思い出話になるでしょう”

曲の途中で観客が
合唱してくれていることに気付いた
ステージには仲間がいた
皆同意してくれる
さっきまでの主役の人
も縁の下で歌ってる

泣きながら大合唱

主役が誰かわからなかった
それはどうでもいいことだ

涙を拭って見えた景色

皆誰かのステージ支えてた

その人のステージも

その下の人のステージも

縁の下の下のステージも

続いてた唄を切り上げた

スポットライトを渡さなきゃ

まだここに立ったことのない人がいる

舞台を降りて縁の下の下へ

知らない人ではあったけど

実は上にいた存在の自分だったから

冷やかしだと思われたけど

君もすぐにわかってくれるから

マイクを渡して天井を支える

支えてくれた上の人の為に

上から聞こえる大合唱

その唄もやっと陽の目を見れた

陽の目を見なかっただけの唄

陽の目を見ない唄（後書き）

今回のテーマは「才能」。噛ませ犬、苦勞人、脇役、ベンチ温め係。そんな経験ありませんか？

今回はかなりネガティブ短編に仕上がっていますが、得意でもないのにやらなきゃならない時も人生にはありますよね。

読点や句読点がないのは、曲のような雰囲気を出す為です。

短編の方にも投稿した作品です。

ヘベレケの唄

足元フラフラ千鳥足

これ以上は危ないよ

ああほらまだまだグデングデ

大衆より高尚である自分

心は誰もがナルシスト

貴方の中心は貴方なの

澄ましたような自分に酔ってるよ

流れのままなど馬鹿馬鹿しい

そんな世界を忘れる為に

今日もグビグビ飲みましょう

足元ヨロヨロ千鳥足

これ以上は飲めないよ

ああほらまだまだベロンベロン

大衆とは一線を画す自分

心は誰もがエゴイスト

他人の中心は他人なの

「可愛い」と言う自分が可愛いよ

そんな奴ほど馬鹿馬鹿しい

離れた世界を離れる為に

明日もグビグビ飲みましょう

心は誰もが正直で
自分が中心な訳なくて
解っているのに猫かぶり
世界を批判するクセに
自分が変えようとは思わない

批判する自分はどうなんだ
そんな自分が愚かしい
心が本当の自分であって
酒は心の真実薬

酔生夢死で終われるものか
二日酔いはとっくに覚めただろう
ほらもう真っ直ぐ歩けるでしょう

へべレケの唄（後書き）

活動報告とは異なる短編を投稿してます、すみません。変更したのです。

「陽の目を見ない唄」と同様、音楽に載せることはできませんorz
句点がないのは唄のような雰囲気を出す為です。テーマは「本音」。

短編の方にも投稿した作品です。

雑草の唄

アスファルトを割って生える緑
あれは何の草だろうか
まだ誰も気にしてない

すぐそこには公園

花壇に植えられた花は
哀れみを込めた横目で見る

そうさ 君とは世界が違う
なあ 君に僕はどう見える

どんなに踏まれようと
どんなに狭かろうと
決してこの根は離さない
芽を出したのがここだった
笑いたければ笑うがいいさ
その顔見て笑ってやるよ

アスファルトを割って揺れる緑
あれは何の草だろうか
まだ花は咲いていない

すぐそこには花壇
ジョウロで育てられた花は
萎れた草を横目で見た

そうさ 君とは次元が違う
なあ 僕は君じゃないんだよ

どんなに踏まれようと
どんなに苦しかろうと
決してこの根は離さない
踏まれ続けて知る世界
見たくないなら反らせばいいさ
その顔見ず無視してやるよ

ここだけが僕の居場所
それは図らずも定められた運命
問題はその後だ
枯れゆくその時
僕にはどんな花が咲いている

どんなに踏まれようと
どんなに醜かろうと
死んでもこの根は離さない
芽を出したのがここだった
生きたければ活きるべきだ
その花見て褒めてあげるよ

さあ 一花咲かせてやろう
これが僕の咲かせた花だ

これが僕の生きた証だ

雑草の唄（後書き）

テーマは「運命」。前にも似たテーマがあつた気が。
短編集として連載する事になり、その第一弾です。
もはや「ゝの唄」はシリーズ化しています。バンプか。

ろくでなし応援歌

僕が居る

君が居る

歌い続ける僕が居る

親が居る

友が居る

通りすがりの人が居る

人にはそれぞれ世界がある

僕の世界には君が居る

世界の一部は君で成る

君が聴くから僕は歌う

届かない唄に意味はない

世界に君が要らずとも

唄が必要としているよ

泣いている

不安になる

逃げ出さないで生きている

僕が居る

君が居る

聴いてくれる君が居る

人にはそれぞれ世界がある

君の世界には僕が居る

世界を支える人が居る

君が聴くから僕は歌う
居ないのならば意味はない
君が君を嫌っても
僕が必要としているよ

「世界は自分に何を望む
自分は世界に必要なか」
悩んだら視野を狭めて
頑張り過ぎる事はない

君が聴くから僕は歌う
聴いてくれるから意味がある
君には君が要らずとも
僕が必要としているよ

君は必要とされてるよ

ろくでなし応援歌（後書き）

テーマは「人の価値」。タイトルが「ろくでなし」でありませんが、このシリーズです。ネーミングに縛りはないので。自分をロクデナシだと思ってしまう人への応援の意味を込めました。要は、どんなに貴方が貴方を嫌っても、この唄を読んでくれた貴方は私が必要としているのです。

埃まみれの唄

随分と疲れた顔になったもんだ
知っているよ 俺を捨ててからだよな

俺はホコリ アンタから出たホコリ
汚いものを見るような眼差し
アンタが落としたものだろう

拾ってみろ きつとかなり重い筈だ
埃まみれで触るの嫌か

自分より上がいたから 現実を見たから
一番じゃないと知ったから
忘れかけていた 埃まみれのホコリ

随分とやつれた顔になったもんだ
知っているよ 夢を捨ててからだよな

俺はホコリ 故意に落としたホコリ
これだけは自分の固有財産
一番でなくてもいいだろう

持ってみろ きつと自信が蘇る
埃まみれの寂れた宝

自分より上がいたから 自惚れだったから

特別じゃないと知ったから
掃除しなかった 埃まみれのホコリ

拾うと重く 手は汚れ
それでも自信は湧いて来た
ホコリはゴミではなくなった

自分より上がいたから 言い訳にするから
目を逸らせないと知ったから
捨てられなかった 埃まみれのホコリ

m y d u s t y p r i d e
埃まみれの誇り

埃まみれの唄（後書き）

テーマは「誇り」。良く言えば言葉遊び、悪く言えばダジャレにより出来た唄です。夢を諦め、捨てた誇りはいつしかゴミに。劣等感を感じないのは一番に立つ人間だけですが、それで誇れるものを捨てるのは勿体ないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1168s/>

うんぬん【短編小説集】

2011年11月15日11時48分発行